

ザ・ボイスメール 11月号

『赤毛のアン』を訪ねて⑤ かわいいおしゃべりと想像力

なぜ私がそんなにアンに惹かれるのか。それは何事も前向きのとらえていく彼女の明るいキャラクター、そのかわいいおしゃべりとあふれる想像力でしょう。

「いいお天気の朝で、とても嬉しいの。でも雨の朝も、好きよ。どんな朝でも、ワクワクするわ。今日一日、これから何が起きるか、想像の余地があるでしょう」(第4章 グリーン・ゲイブルズの朝：松本侑子訳、以下も)

「私の経験から言うと、物事は楽しもうと思えば、どんな時でも楽しめるものよ。もちろん、楽しもうと固く決心することが大事よ」(第5章 アンの生い立ち)

「・・・寝室は、眠るためにあるんだよ」「まあ、マリラ、夢を見るためでもあるわ。美しいものに囲まれた寝室の方が、いい夢がみられるでしょう？」(第16章 お茶会、悲劇に終わる)

すべてを前向きにとらえ、人生を楽しみ、夢を広げていくアンの生き方がほうふつとしてきます。

「人に謝って許されるって、ほっとして、気が楽になるわね。今夜は、星がきらきらしているわ」(第10章 アンのお詫び)

「明日は、まだ何の失敗もしていない新しい一日だと思うと、ほっとするわ」(第21章 風変わりな香料)

自分の失敗をすなおに詫げる純粹さ。また失敗の多い日々のなかでの乙女のやさしい心に読者は親近感を抱き、さらに、明るく毎日を生きようとするその考え方を、自らの人生に取り込もうとするでしょう。

こうして、しゃべりだしたら止まらない彼女に対するマリラの言葉も楽しい。

「アン、一つ言えることはだね」マリラが言った。「バリー家の屋根から転がり落ちて、あんたの舌は、かすり傷一つ負わなかったってことだ」(第23章 アン、名誉をかけた事件で、憂き目にあう)

今まで子どもを扱ったことのないマリラが、戸惑いながらもアンのしつけをしていく。愛していながらも、不細工がゆえにやさしく振る舞えないマリラのアンに投げかける言葉。

一方、クリスマスに彼女が欲しがっていたパフスリーブのドレスを贈ったマシューのやさしさ。それは初めに彼女の引取りを断ろうとしたマリラとの対話に表れています。

・・・マシューは口ごもった。「だが、そのう、あの子を引きとるのは、やっぱり難しいかのう」「当たり前ですよ。あの子が私たちの何の役に立つんですか」「でもなあ、わしらが、あの子の役に立つかもしれないよ」(第3章 マリラ・カスバートの驚き)

「わしらが、あの子の役に立つかもしれない」——なんという温かなマシューの心！やがて、マリラもアンを心底から愛するようになり、彼女の情愛も一層深まっていくのです。

物語の最終段階では、そんな二人に育てられたアンの成長ぶりが出てきます。

「クイーン学院を出た時は、私の未来は、まっすぐな一本道のように目の前にのびていたの。人生の節目節目となるような出来事も、道に沿って一里塚のように見わたせたわ。でも、今、その道は、曲がり角に来たのよ。曲がった向こうに、何があるか分からないけど、きっとすばらしい世界があるって信じるわ」(第 38 章 道の曲がり角)

最終章——競争の激しい大学への奨学金試験を勝ちとり、洋々とした前途が開けた矢先にマシューの突然死と、グリーン・ゲイブルズを手放さなくてはならないというマリラの苦悩……。それを知ったアンは、ここまで育ててくれた二人への恩と愛情に、進学をあきらめ村に居残ることを決めるのです。どんな苦難に直面しても、前向きにとらえ、人生を開いていこうとするアンの勇気！それに 100 年前のカナダの生活描写は、自分たちの半世紀あまり前の子ども時代をも思い出させてくれます。

その一：

孤児院にいたアンは、いろいろないきさつがありましたが、結果的にマシュー、マリラ兄妹の家で育ててもらえるようになり、学校にも通えるようになりました。

登校の初日に事件は起こりました。クラスの男の子ギルバートから、彼女が最も気に入っている赤毛を「ニンジン、ニンジン」とからかわれたのです。怒ったアンは、使っていた石板を彼の頭上に打ち下ろした！！

石板といえば、終戦後 3 年目に私が入学した長野県の小学校のクラスでも使っていました。すべてに物資欠乏の時代でした。ノートは茶色がかったざら紙。教科書の一部さえも兄からの“おさがり”でした。つぎのあたたか衣服は当たり前。昼食の弁当を持ってこられない仲間もいました。

ギルバートは頭脳も性格もよい好男子でした。アンの反目は続きますが、最終章で仲直りをする。後に続く「アン・シリーズ」では、二人は結婚をし幸せな家庭を築いていく。その出だしにこんなエピソードの伏線を置いたモンゴメリーのたぐいまれな構想力！しかも「叩き割ったのは石板で、頭ではなかったが、真っ二つに割れてしまった」(松本侑子訳)と、ユーモアのある表現も面白いですね。

その二：

ときどき出てくるアンの無鉄砲さは夏目漱石の『坊ちゃん』をほうふつとさせます。正義感にあふれ負けん気の坊ちゃんは「そこからは無理だろう」とからかわれて、校舎の 2 階から飛び降りて怪我をします。

アンは“腹心の友”ダイアナの家のお茶会で、仲間とのひよんな駆け引きから、引くに引けず、屋根に上り、結果的に屋根から転げ落ちて足首を骨折する話など、エピソードに事欠きません。日本文学の傑作に類した点があるのも、親しみを感じさせるところです。

島をめぐる旅のなかで車椅子の日本婦人に会いました。K さん。宮崎から羽田、成田、トロントの空港を経由して州都シャーロットタウンへ。60 歳の誕生日を祝い、娘二人が旅

をプレゼントしてくれたのだといいます。リウマチで足が悪く、娘の一人が付き添って人生で初めてとなる海外旅行とのことでした。

「車椅子で大変だと思いましたが、カナダに着いてみると、みんなとても障害者に親切で感動しました。アンは40年前に村岡さんの訳で読んで以来、その舞台を訪ねるのが夢でした。アン・シリーズも全部読みました。プリンスエドワード島は、牧歌的な広々とした光景で心が洗われる思いです。空気も澄んでいて、持病のリウマチもあまり気にならなかった。何があってもくじけないアンの生き方は、40年来の自分の支えでもありました。送り出してくれた娘たちに、親切に面倒を見てくださったカナダの皆さんに心から感謝しています」

夢を抱いて努力していれば、いつかは実現できる。アンが教えてくれた一つの具体例とも言えるでしょう。

一方、マシューは、世間づきあいが苦手な口下手の60代の独身男でした。その彼がアンを育てていくなかで、人を愛する喜び、人から愛される幸せを知って大きく変化していく。マリラも質実のみを重視する気質の50代の独身女性でしたが、アンに感化されて人間的に成長、慈愛深く心豊かな大人へと劇的に変わっていく。その二人の成長過程が同じ年代にある自分たちにも、いろんな示唆を与えてくれているような気がします。

歳を重ねるにつれて夢を失い、身体だけでなく、心まで枯れてしまう人も多い。年をとるほどにアンのような心のみずみずしさをもちたいものです。

古典は何度読んでも新しい発見があります。名作はいくつになっても心を成長させ、若返らせてくれることを実感しているところです。